



デキる妹は仲ですか？
2

小説 089 タロー 挿絵 あここ。

立ち読み版

序章

お兄ちゃんとなんてデキたくない？

一章

お兄ちゃんとデキたいな？

二章

お兄ちゃんとデキちゃおう！

三章

お兄ちゃんの、ちゃんとデキなきやつ

四章

お兄ちゃんとデキてるなんてっ!?

五章

お兄ちゃんだけのデキちゃう妹っ

登場人物紹介

Characters



みこもり みく 御小森 実玖

／ T158 B83 W52 H85

振悟の義理の妹で、芽衣菜の双子の姉。
今でこそ兄に対してツンツンしているが、
幼い頃はお兄ちゃん大好きで何かとじゃ
れついていた。明るく活動的な美少女。



みこもり めいな 御小森 芽衣菜

／ T165 B93 W56 H89

振悟のもう一人の義理の妹。兄とは一定の
距離と保とうとするかのように振る舞うクー
ルビューティーだが、実は怖がりな面も。G
カップの巨乳が人目を引いてやまない。

みこもり しんご 御小森 振悟

平凡な学生少年で、実玖と芽衣菜の
義理の兄。幼少期から妹たちを可愛
がってきた兄バカでもある。

生の乳感触に興奮も顕な義兄少年。だが、愛撫に高まるのは何も彼だけではなかった。

彼の手つきはまだこわごわで、かえって丁寧なタッチになった。そのせいか、揉まれる女体は微細に刺激されてピクピクと反応してしまう。

深く、でもソフトに乳肉を掴まれるたびに、肌にはうっすらと汗が浮いて淡い肌色に染まっていく。腰も官能のくねりみせて眉根にも薄い縦ジワが寄る。そしてモミモミと揉みまくられるたび、ピンクの頬は心地よさそうに緩むのだ。

（め、芽衣菜の方が大きくてぶりぶりしてる。撫でるとすごい気持ちいいっ！ でも実玖のも柔らかくてすごい。おっぱいが零れちゃいそうっ！）

サイズ以外にも、姉妹の乳房にはそれぞれに個性があった。芽衣菜のバストは張りが強くて、揉んでも揉んでも物凄い弾力感が返ってくる。果実で言うなら、果肉がミッチリ詰まっっていて究極の食べごろという感じだった。

逆に実玖のオツパイは、びっくりするほど柔らかくてどこまでも指が沈んでしまいそう。その分、指に絡み付いて揉み応えが抜群だった。

「実玖も、芽衣菜も、すごくいいおっぱいだよ。ああすごい、僕、セックスしたい……！」
魅惑のバストを楽しんでいると脳髓が溶けてしまいそうだった。これが女体。これが大好きな美少女たち。そう思うと、頭と腰がメラメラと燃え上がっていくようだ。

それに。

「あんっ、あっ、ああ……っ。み、ミクう、胸っ、痺れちゃうよお……！」

サイドポニーがふわふわ動いて細い首もしなやかに躍る。揉まれる胸に縋るように膝立ちの肢体をゆらゆらさせる。普段明るい彼女の顔は桃色に火照って艶めかしくて、乳首を触ってそつと捏ねるとピクツ！ とおとがいが跳ねていた。

「んっ、はああ、あああ……恥ず、かしいです。でもお……でも、芽衣菜……！」

仰向けの黒髪少女も、何度も睫毛を震わせては艶めかしく顔を背ける。たわわな巨乳を軽く搾ると、ああっ！ と小さな悲鳴を上げて細い腰をもじっ、と控えめにくねらせていた。

どちらも感じているのは間違いなく、今では自分から胸を突き出しウツトリと腰を回している。生の乳房をしつかり愛でられ恍惚の表情を魅せてくれる。小さく浮いた汗の珠も、ツウ……と伝い落ちて煌めいていた。

初心で、けれどゾクゾクするほど官能的な二人の様子に、義兄の股間のテントは強張る一方だった。

「二人ともっ、僕……セックス、するよ？ だから、その……せ、全部、服を……」

いよいよ昂ってきた彼は、彼女たちの最後の砦も希求してしまう。

そしてセックス——子作りしてくれるという愛しい義兄に、義妹たちも了解してくれた。

「う、うん。じゃあ……脱ぐね？」

そう言うのと、実玖は立ち上がってピンクの紐パンティに指を伸ばす。

ちようど座した少年の目の前に彼女の腰がくる形になった。間近でまるやかな臀部を見

られ、さすがの実玖も、ああ……と羞恥のため息を零す。

しかし可愛い小悪魔は、もじつ、と腰をくねらせてから両サイドの蝶結びを解いていく。左右の指に引かれると、シユル……と紐が力をなくして生地が少しづつ緩んでくる。そして実玖の指が離れると、とうとうパンティは耐え切れなくなり――

「つつゴクリつつ！ おおお……！ み、実玖のっ……！」

無音で下着が床に落ちると、ついに乙女の秘所が顕になった。雪のような美肌の股間に薄い恥毛を生い茂らせた、美麗で淫らな女体の神秘が！

そこは、綺麗に手入れされたような美しいデルタ地帯だった。縦長の恥毛は細くてフワフワで、まるで産毛のような繊細さ。しかしこんもりとした恥丘の中央は、薄桜色の肉の花弁がくつきりと縦に割れ目を作っていた。

「き、キレイ、だ……それに濡れてる……！」

「う、うん。ミク、気持ちよくって……なんでかな、じゅん、てなっちゃった……！」

直立する彼女は、さすがに顔を真っ赤にしていた。異性に向けて生の股間を突き出しているのだ。当然だろう。そして少年の顔が近づくと、もう耐え切れずに、やあ……つとソコを隠していた。

「はあ……はあ……お、おにいちちゃん、ミク、恥ずかしい……！」

「ゴクツ！ だ、だいじょうぶ、だよ？ 実玖のソコ、すぐくステキだ……！」

明るく誘う美少女が、秘所を見られて困惑する。その弱々しげな態度が、逆に少年を勢

い付かせる。

紅葉のような掌がスツと横に退けられると、乙女は改めて目撃される。子作りのための女にとつて一番大事な神秘の入り口を。

「ああ……はああ、はああ……お、おにい、ちゃあん……ミク、ミクつ、どきどきつて、どきどきつてえ……！」

「実玖……何て、エツチなんだ……」

覗き込むように見てみれば、薄い花弁は小さく息づきうつすらと蜜が塗されているのが分かる。蜜は狭そうな奥から溢れてきていて、じつくりと見つめてみると、恥ずかしげに花弁がわななきさらにトロツと蜜が零れた。

「はあはあはあつ！ おお、おにいちゃん、ミク……ほんとに、恥ずかしいっ……！」

「つああ、ご、ごめん。でも、ステキだ……キレイなおま○こつ……！」

生まれて初めて見た女性器は、どこにもグロさなんてない初心なピンクの媚粘膜だ。いよいよ羞恥を隠せない実玖の姿も、見ているだけで頭が焼けるほど興奮する。

強い視姦に耐えかねたのか、実玖はペタンと尻餅をつく。股を押さえて肩を小刻みに震わせるところも、いかにも不慣れさを表して清い処女性を見せてくれる。

「お、お兄ちゃん、あの……め、芽衣菜、も……」

そんな姉の恥じらう姿に黒髪少女も少し羨むように訴えてくる。こちらも相当恥ずかしそうだが、姉がセックスしてもらえそうなのを何とはなしに悟ったのだろう。

もちろん娠悟も芽衣菜をないがしろにする気などない。今度は彼女のパンティにも手かけた。

「大丈夫、芽衣菜にもしてあげるから」

「ああ、お兄ちゃん……」

仰向けの両足を上に上げて、サイド部分からゆっくりと引き抜く。少女の腰が少し浮いて最後の脱衣を手伝ってくれる。

そして足からパンティを抜き取ると、優しく両足を開いてあげて。

「ああっ、お兄ちゃん……み、見られてっ」

可憐に口元を覆う義妹の、大切な秘部が室灯の輝きに照らされていた。大きくV字を描く両足、その中心を義兄に見下ろされたのだ。

「おお、すごいっ。芽衣菜のおま○こっ……!!」

——ヒクッ、ヒクヒクンッ。

じつくりと覗かれるクレヴァスは、雄の視線に恥じるように切なか弱く震えてみせた。だが同時に、濃密な愛液を滴らせて恋しい雄の種付けを待っていた。

芽衣菜のソコは、実玖に比べれば少しだけ淫毛が濃い気がした。けれどやっぱり初心な感じで、盛り上がった恥丘の中央にも初々しい薄朱色の花卉が咲いていた。

(すごいな。エッチなのに可愛らしい……)

やはり発育では芽衣菜が一步リードしているのだろう。こちらは蜜の量も多く、匂い立

つような魅力がある。でもラビアはとても純情で、顔を寄せるだけでまたヒクヒクと震えては、透明な蜜をトプツと溢れさせるのだ。

（何てエッチなんだ二人とも！　こんなに濡れて、僕を欲しがって……ああ、僕もうっ！）
もう、矢も楯も堪らない。拙い技で愛撫してきたが、基本童貞な彼は早く交わりたがっていた。

思い切つてズボンを脱ぎ去ると下半身を露出させ、猛り狂った勃起ペニスを美少女たちに向ける。

「はああつ、お、お兄ちゃん？」

突然の脱衣に惑う芽衣菜に、娠悟は軽く膺唇を撫でてやりながら教えてあげた。

「せ、せつ、セックスはね、女の子の、ココに、おちんちんを入れて、白い精子を出して完了なんだ」

「——え……ええええつ!!　ウソでしょ？　そんなおつきなの、は、はいんないよお!!」
それを聞いた途端、実玖は仰天して肩が傾いでいた。

「あ、ああ……!!　そ、そう、なんですか？　こ、こんな、お、おちんちんが……芽衣菜の、ここに……?」

また芽衣菜も、むき出しの勃起を前にして口に手を当て驚いている。

やはり性知識に欠落箇所があるのだろう。娠悟だって初めて知った時には驚いたものだ。それに義兄のソレはやはり立派で、昨夜以上に漲みなぎっているのだ。処女が本能的に恐れるの

も無理はない。

「で、でも、本当なんだ。だからセックスって恥ずかしいものなんだよ」

正直、ほんの少しだけ理性が顔を出した。もしこれで恐がって拒むようなら、彼はギリギリ『兄』に戻れたかもしれない。

けれども、純な美妹らは顔を見合わせて頷くと、意を決したように揃って股を差し出してくれた。

「そ、そおなんだ……じゃあ、じゃあ……おちんちん、入れてええ？」

「お兄ちゃん……お、お……おちん、ちん、ください……」

美しい裸体を惜しげもなく魅せ、バージン美少女が自ら両足を開いてくれる。その極上の誘惑の前に、理性は容易く敗北を喫していた。

「ゴクリッツツ!! じゃ、じゃあ、まずは実玖から……そこに寝そべって？」

目眩さえしながら促すと、小柄な少女は白く眩しい裸身をくねらせ、そっと床に身を横たえた。

「き、キレイだ、実玖……!」

「うう、は、恥ずかしいよお……っ」

白い太腿がモジッ……と絡まり生の恥丘を少しだけ隠す。それでも、細い亀裂は湿り気を帯びて挿入を待っていてくれる。

ここまで来ては、もう後には引けない。すでにガチガチの雄の勃起を、彼はゆつくりと

迫らせていく。

「じゃあ……い、いくよ？」

「う、うん……ああ……っ」

さすがに恐いのか、小悪魔少女も不安そうにソレを見ている。それでも近づけられると、そつと両足を開いて雄腰の侵入を許してくれて。

——つぶ……にゅぷり……。

「んあっ!! おお、おにいちゃあん……!!」

仰向けの裸体が結合の予感にわなないてみせた。俗に言う正常位、その待ちの姿勢の乙女の媚粘膜に少年の肉先が触れたのだ。

そのまま腰を抱き寄せるようにゆつくりと押し進めてみる。濡れた粘膜はまるで吸い付くように気持ちよくて、あつという間にイッてしまいそうだった。

「うう、気持ちいいっ。実玖、もつと入れちゃうよ？」

「はあはあ、う、うん、せつくす、してええ……!!」

薄い桃色の清い処女腔。そのゼリーののような感触に震えながら、少年はさらに腰を進める。濡れた中は狭いのにとても柔らかい。

そんな気持ちいい媚粘膜に、少しずつペニスが飲み込まれていく。と、カリが埋まった辺りで、濡れた柔らかい肉感触に先がぷるんと弾かれた。

「はあはあはあはあっ! おお、おにいちゃん、そこ、そこおお……!!」

「ああっ、だ、大丈夫実玖ちゃん!!」

少女の呼吸が荒くなって可愛いお腹がブルブル震える。広げた両腕もビクビク震えて、それを芽衣菜が心配して握る。

(ああ、やっぱりだけど、実玖、初めてで……これが、処女膜っ?)

そう思うと、より一層彼女が恋しくなる。また同時に、未知の恐怖に怯える姿をいたわりたくなって、娠悟は上から覗き込むと、また深く唇を吸っていた。

「ちゅううつ、ちゅ、実玖……好きだよ、ちゅっ」

「んん!! あふう、おにいちゃ……んくちゅっ」

見つめたままキスしてあげると、つぶらな瞳がトロンと甘く垂れてくる。唇からも唾液が染み出てアゴを静かに濡らしていく。

強張った頬も色味を増して気持ちよさそうに緩んでくる。瞳もますます潤んできて、とても清らかな光を湛える。

そんな彼女が恋しくなって、少年の腰がまた一段階押し込まれると……

——ずぶぶ……ぶちっつ!

「んむうう!! んっつくああああんっ!!」

絞るような抵抗が消えてついにサオまで埋め込まれる。途端、実玖の喉から劈つんぎくような悲鳴が上がった。

(くうっ!! きっくく気持ちいいっ! 中っ、キツくて、ぬるぬるで、あ、熱いっ!)



その言葉を聞いた瞬間、娠悟の股間はグツ、と熱く盛り上がった。

実玖もそうだが芽衣菜もまた、自分に抱かれて孕みたいと願っている。女性として最高の愛情を向けてくれる。その、一途で穏やかな受精要求が少年のモラルをじんわりと溶かしていく。

「芽衣菜……僕も好きだよ。だから触っていい？」

などと訊ねつつ、すでに手は伸びていた。誘ってきたのだ、今さら拒まれるなんて思いもしなかったし、覚えたばかりの女体の味に男心はあまりにも弱かった。

少年がまず触れたのは、やはり立派すぎる乳房だった。彼女の膨らみはキスする間も胸板を押して、その充実した肉感を伝えてきている。美しさもさることながら、この巨乳こそ芽衣菜のチャームポイントだった。

「あっ？ お、お兄ちゃんっ。め、芽衣菜のおっぱい、好き？」

「もちろんさ。こんな大きな胸、男なら誰だつて触りたくなるさ」

義兄の言葉ももつともだった。彼女の乳房は豊満すぎて、とても学生とは思えない色気がある。歩くだけでもユサユサ揺れて、いつだつて男の視線を集めていた。

しかも今は水着姿。少し離れて見つめてみれば、改めてその豊かな肢体に股間が熱くさせられた。

（水着つてのもポイント高いよ。胸とか腰とか、すごく膨らんでパツンパツンだし、濡れたところなんかもキラキラしてて妙にエッチだ）

主にホワイトのスウイムウェアは、色気目的はないのだけれど不思議と健康的な色気がある。どこか純情な乙女に見えるのだ。競泳用っぽくないところも見ていてとても麗しい。それに股間のハイレグラインが生足の魅力を際立たせる。お尻もタップリの芽衣菜には、むしろ下手なパンティよりもいやらしく感じる。

しかも芽衣菜は超巨乳なのだ。窮屈そうな水着の胸元はブラにも負けない魅力があつて、少年の愛撫を自然と誘っていた。

——さわつ、もみつ、もみつ、もみたぶるんつ。

「ああっ？ お、お兄ちゃん……おっぱい、はあ、そんなに……」

「う、うん。でもすごく気持ちいいよ。お肉がいっぱい詰まってる手触り最高っ」

芽衣菜のバストはまるで外国人みたいだった。ぱんつ、と張りがあつて型崩れしておらず、揉むと素晴らしい弾力で押し返してくれる。さらに水着のツルツル感が、また実に揉みやすくて刺激的だった。

「ほら、芽衣菜のおっぱいとっても大きい。まるでスイカみたいだね？」

そう囁くと、初心な乙女は恥ずかしいつ、と顔を背けた。そんな彼女が可愛く想えて、娠悟は両手で乳肉を掴むと持ち上げるようにしてみせた。

「わあ、すごく重たい。もしかして芽衣菜、肩凝ったりする？」

「っ……！ こ……凝っちゃう、ときも……あんっ!!」

そしてパツと手が離れると、量感タップリの水着巨乳は、ぶるるるんっ！ と大きく波

打ち揺れた。

「すごいおっぱい。僕、ほんとはずっと触りたいって思ってたんだ」

「ああ、はあ、ほ、本当、ですか？」

「うん。思ってた通り、最高の巨乳だよ。もう指が溶けちゃいそう」

すでに理性は鳴りを潜めて次々と本音が飛び出てくる。腰をくねらせる少女の魅力にどんどん没頭していく。

それを聞いた巨乳少女は、恥ずかしそうなのに少し嬉しそう。愛撫に任せた清らかな身体はふんわり色づいて美しいし、涙の跡の残る頬も幸せそうな桃色だった。

そして、少し下がって距離を空けると水着の襟に指をかけて、そっと下げ始めてくれる。「嬉しい……お兄ちゃんが喜んでくれるなら、め、芽衣菜……」

濡れた生地が吸い付きながらも確実にずれていく。まるで拘束された魅惑の女体が頭になっっていくようだ。

生地が膨らみにつつかえると、とてもキツそうでそこがまた色っぽい。それでも、めくられるように水着が下がると、キツキツの襟からムッチリと乳肉が溢れてきて。

——ぶるるんっ！　ぶるぶるんっ。

白い球体が飛び出るように顔を出した。左右に並んだ二つのそれは、息苦しきから解放されたかのように、上下に柔らかく躍ってくれた。

やはり生の双乳は魅惑的で、そこにあるだけで雄の欲求を刺激する。小窓の光が陰影を

作ってアンダーラインがくつきり出るし、水気を帯びた美肌が光ってコントラストがあまりにも美しかった。

「き、キレイだ、芽衣菜。ステキなおっぱいだよ」

自然と賛辞さんじが口を滑り、無意識に掌も動く。

優しくバストに触れると、今度は生でじつくりと揉んでいく。解放された美妹の丸みは、プール上がりなのにポツテリと温かかった。

「あん、んはぁ……」

「気持ちいいよ。芽衣菜のおっぱい、パンパンで最高っ」

一層熱を帯びた愛撫がより濃密に彼女を味わう。両手で外円を何度も撫でれば特大サイズを堪能できるし、指先でツンツンしてみれば瑞々しい弾力を感じることができた。

芽衣菜もまた、少年の優しげな手つきですぐにも官能的になっていく。恥ずかしいのか我慢が見えるが、つぷりと五指が押し込まれると肩がカクン！と跳ね上がった。

「芽衣菜、いい反応っ」

奥歯を噛んでイヤイヤをすることが感じているのは明白だった。指の埋まった大きな丸みは突き出されたままぷるぷるしてるし、肌もうっすら朱色が差して小さな汗を浮かせている。そして両の乳首を指で挟み、ちよつとだけつねるようにしてあげると。

「あふうんっ!! つつくあぁ、だっ……だめええ……!」

豊富な肢体がびくつとわななき内股が小さく震え始めた。尿意を堪えるみたいに膝と膝

を擦り合わせる。

ピンクの唇も細かく喘いで、はっ、と吐息を漏らす。さらに内股はキラリと光り、一筋の汗を伝い落とした。

「芽衣菜。おっぱい、感じやすいんだね？」

「そ、そんな、こと……っつ」

俯き加減で赤面するが、もう芽衣菜は瞳をウルウルさせていた。白磁のような乳房の上にも細かい汗珠が煌めいているし、小さな小さな胸の突起はプク、と膨らんでいるようだった。

初心な態度もしつとりと魅せつつちゃんと身体は高まる少女。その揺らめく瞳とつやめく唇が生唾を飲むほど官能的で、振悟はそつと、可愛いよ、と囁く。すると芽衣菜は切なそうな面持ちになつて、

「お、お兄ちゃん。芽衣菜……お兄ちゃんだけのものになりたい、です。お兄ちゃんのしたいこと、いっぱいしてください……」

と、彼色に染まることを望んできた。

（そんな。ああでも、芽衣菜は、僕だけの女の子になりたいんだ。じゃあ、い、イロイロしちゃっても？）

自分たちだけの秘密のエッチ。確実に開発される純な乙女。そんな妄想が、目の前の巨乳をより楽しむことを助長していた。

「じゃ、じゃあ……お、おっぱいで、おちんちん挟んでコスってくれる？ ああついやならいいんだよ別に！」

言った直後に慌ててしまう義兄少年。女性と付き合った経験もないため、どこまで許されるのかも分からないのだ。

だが。お願いされた義妹少女は、ちよつと驚いた様子を見せたが、すぐにポツと頬を染めてしずしずと頷いてくれた。

「う、ううん、いいの。お兄ちゃんが、してほしいなら……芽衣菜もしたいです」

そして少年の前に屈むとズボンを下げて、膨らんだパンツを恐る恐る脱がせてくれる。

「あ、ああ……お兄ちゃんの、おちん、ちん……す、すごく、大きく……！」

勢いよく飛び出したものが清い乙女を驚かせる。すでに義兄のペニスは先走り汁を浮かせていて、ピンツ！ とヘソまで反り返ったのだ。

長い睫毛は細かく震えて目の前の怒張に圧倒される。両掌は口元を覆って初心な驚きを見せてくれる。

それでも、ビクビクと脈打つ血管を見て濡れた瞳をうつすら細めると、熱い吐息を漏らして乳房を掴み、ぱっくりと谷間を開いてくれた。

「ああ……は、挟み、ますね……？」

股間を脱がされつついつい恥じる少年だったが、健気な少女に跪かれては逃げることで許されない。

眩しい巨峰の深い谷間が、ゆっくりと肉棒を挟み込んでいく。

「おおっ！ 芽衣菜 あっ」

やがて乳肉が左右から閉じられきゅつ、とサオまで包み込まれる。途端、蕩けるような快感に思わず少年はわなないていた。

はち切れそうな特大バスト。それは勃起にとつて、ぷりぷりの肉まんみたいな感触だった。肌はきめ細かく温かくつてスベスベだし、柔らかいお肉は弾力に富んで心地よくペニスを押し潰してしまいそうさ。

でも、本当に潰されてもいいくらいにタツプリの肉感が気持ちいい。そして芽衣菜に動かれると、娠悟はつい呻いてしまった。

「はああ、こ、こ、こ、ですか？ ああ、お兄ちゃんのおちんちん、こんな、ビクつて……！」
黒い髪がふわりと揺れて上半身が前後してくる。それに合わせて二つのオツパイも緩やかに動いてペニスを優しく摩擦してくる。

「あつ、ああつ！ そう、いいよ芽衣菜、おちんちん、ゴシゴシするみたい……！」
サオがビクンと脈打ってしまい、睾丸もウツトリと解れていく。もうこのままイキたくなつて、娠悟はさらに懇願する。

すると芽衣菜は、気持ちよさそうな彼を見上げて幸せそうな微笑みを浮かべた。

「こ、こ、こ、ですか？ 分かりました。いっぱい、気持ちよくなつて下さいね？」

そして両手で乳肉を掴み直すと、汗に濡れた乳肌で滑らかにペニスをシゴいてくれる。

——むちゆりっ、むちゆりっ、たぷりっ、たぷりっ……。

「おっ、おとおっ！ くあ、いいよ、いいっ！ 芽衣菜、パイズリ知ってるの？」

「ああ、あ、ぱ、パイ、ズリ？ いいえ、でも、お兄ちゃんがゴシゴシして言うから……んああ、それにっ……おちんちん、ピクピクしてます……！」

頼んでおきながらちよつとだけ疑問に思った娠悟。だがパイズリそのものを知らない芽衣菜は、恥じらいと驚きの混じった面持ちで谷間のカリを見つめてくれる。

しかも。幾度も乳奉仕を続けていくと、彼女の瞳がトロンとしてきて頬がますます色味を増してきた。

「はあ……はあ……お、お兄ちゃんのおちんちん、どんどん硬く……熱い……気持ち、いいんですね？ 芽衣菜も、とても……！」

揺れる瞳はキラキラしていて初心な可憐さでいっぱいだった。添える掌も少しおつかなびっくりではある。

しかし少年の腰が悶え始めると、恥じらいの中に恍惚を浮かべてウツトリした様子でオッパイを揺すってくれる。

「ああ、お兄ちゃん、好きです。あ、愛しています。だ、だから、熱いおちんちん、き、気持ちよく、なっ……ああっ……！」

「め、芽衣菜……ゴクッ、すごい、エッチ……！」

清らかな巨乳娘は間違いなく義兄のために一生懸命パイズリしてくれている。けれどそ

れだけではなく、当人さえもが胸を擦られて感じているようだった。

たわわな乳房は上下に弾んで艶めかしく形を変えて、溢れる先走りをタツプリと表面に塗りこんでくれる。ヌメリがとても強まってきて実に滑らかに摩擦してくる。

支える両手にも熱がこもって乳房に淫らな波紋を刻むし、はち切れそうな膨らみたちはペニスを嬉しそうに締め上げてくる。よく締めまり、よく滑る柔らかなオツパイでの愛撫は、おま○こにも負けない快樂刺激であつという間に勃起を追い込んできた。

しかも芽衣菜は谷間の前で指を組むと、腰まで使ってしつかりとペニスを愛でてくれた。楕円に歪んだ爆乳が吸い付き、肉棒全部が蕩けそうになつてくる。

「ああっ！ 上手っ、芽衣菜っ！ 僕もうっ！」

（すごい！ まるでこうしたかつたみたいのエッチだ。芽衣菜のおっぱいってほんとにステキっ！）

娘悟は知る由もないが、芽衣菜もまた巨乳を褒められ、彼のためなら乳房のすべてを捧げるつもりだったのだ。だからこそ、悦ぶカレシの姿を見て心底ウツトリしている。

「はあはあ、すごい、おちんちんまだ硬く……お兄ちゃん、いいんです、出してください。芽衣菜のおっぱいで感じてください……！」

そして恋人の高まりを見て取った乙女は、ついに乳房で滑らかなスパートをかけてきた。

—— たぶちゅっ！ むちよむちよたぶちゅんっ！

「あううっ！ いい、激しいのいいよ芽衣菜っ、も、もっど……！」

「はい、もつとですね？ んはあ、硬い、熱い、た、逞しいのが、こんなに……！」
振悟は堪らず仰け反つていき、芽衣菜は瞳を潤ませていく。少年の腰がビクビク震えて水着の肢体はくねくね揺れる。

今や更衣室はむせ返るような汗の匂い。跪く女体と立ち尽くす少年、二人の肌から汗が噴き出て艶めかしい個室に変える。

豊かな乳房はタプタプ弾けて真珠のような汗を散らし、谷間はタツプリの湿り気でもつて熱く男根を愛でていく。動きに合わせてはだけた水着もゆらゆら躍っていた。

ハイレグラインも汗が伝って濡れる女の色香を魅せて、長い黒髪は何度も広がり乱れた乙女を演出している。事実、芽衣菜は乳房を両手で捏ねてカレシと共に昂っていくし、微かに舌まで溢れさせて淫らなほどに喘いでいた。

「はあはあ、お兄ちゃん、ああお兄ちゃん、硬く、すごく、芽衣菜、胸え、熱くう……！」
「僕もだ、おちんちん熱いつ！ 溶けそう、出そう、芽衣菜のおっぱい最高……ああっ！」
完全にノった義兄少年は自らも腰を振って谷間を楽しむ。淫毛まで埋め、充実した肉感を腰全体で深く味わい尽くす。

と、さすがに快感が溜まりすぎて彼はクツ、と呻く。すると芽衣菜は極上の甘い微笑みを浮かべて、上から下へ、優しいとどめの一擦りをしてくれた。

「あああ、いいですっ、い、イってくださいっ……！」

「うう、芽衣菜……うあううっ、出るっ！」

——つぴゅううっ！　くびゅっぴゅびゅっぴゅううびゅうっ！

「はああああ……！　ああ出てますっ、白いつ、お子種ええ……！」

ニヨキツと出た亀頭の割れ目が、白い飛沫を撒き散らした。恋人義妹の許しに甘えて堪えたものを解き放ってしまったのだ。

それは宙で放物線を描き、そのまま少女の顔に散つてしまう。おかげで淡い頬や口元、鼻はおろか、前髪にまでビチャビチャと当たり、淫らな汚れとして広まってしまった。

「っっ！　はあ、はあ、ご、ごめん芽衣菜！　つい……！」

（何てこった。実玖に続いて芽衣菜にまで！）

またしても可愛い義妹、いや恋人の顔を精液で汚してしまった。それは、物凄く男性本位のことだに思えてやっぱり罪悪感が湧いてしまったのだ。

なおも残滓ざんしを吐き出しながら、もうかけないようにと下がる娠悟。対する芽衣菜はとうとうと——腰と乳房をヒクヒクさせながら、息を弾ませて身震いしていた。

「あ、ああ、お兄ちゃんの、お精子っ。熱い……すごい、匂い……！」

粘着質な白蜜が垂れて頬をぬるりと伝っていく。もちろん谷間はもうベトベトで、ツンと匂う液溜まりを作って汚れた感が強く出ている。

なのに彼女は微塵も嫌悪を表さないで、恍惚の表情を浮かべていた。

呆けたような眼差しも色つぼく唇は少し締まりがない。しかも、アゴについた粘液を震える指でそつと掬すくうと、潤んだ瞳でじつと見つめ……



そつと唇に寄せていくと、ちゅぷりと口に含んでみせた。

「んむ……コクンっ。はああ、お、美味しい、です……お兄ちゃんのお精子……」

「め、芽衣菜……!」

ペロリと指を舐め取る様が、びつくりするほど艶めかしい。まるで、本当にセックスを
楽しむ大人の女性のように見えているだけでゾクゾクしてくる。

それでいてなお、幼い純情も消えてはいない。両掌を重ねて精液まみれの顔を俯かせ
ると、ポツと頬を染め直し、豊かなお尻を小さく揺すって愛の子作りをおねだりするのだ。

「あのっ。芽衣菜、またお兄ちゃんに……赤ちゃん、授けてほしい……です」

羞恥で顔を覆うところが、芽衣菜らしくて初々しい。おずおずとちゃんと続きをねだる
ところも、いじらしいのにいやらしい。

（で、でも、本番シチャうと、ば、バレないかな？　ここは更衣室なんだし）

多少のことなら大丈夫だろうが、本番ともなるときつと喘いでしまうだろう。放課後だ
から人気もあるし、声を聞かれたらバレてしまうかもしれない。

芽衣菜もそれは分かっているのだろう。精液まみれの顔を切なげに潤ませてくる。

「ごめんなさい……迷惑、かけちゃって。でも芽衣菜、お兄ちゃんと一緒だと……好きっ
て気持ち、止まらなくなつて……胸、ドキッ、ドキッ、つて……」

「ゴクッ……わ、分かったよ芽衣菜……!」

彼のソレも、まだまだ臨戦態勢が解けていない。そんな状態で、初心な恋心一直線なこ

とを言われた日には、とても断りきれるものではなかった。

結局、興奮に背中を押されて乙女の肢体に飛びついてしまう義兄少年、振悟だった。



「さ、お尻をコッチに向けて？」

優しく腰を導かれて、水着少女は恥じらいながらも従っていた。

（ああっ、お兄ちゃんにお尻向けて……は、恥ずかしいっ）

冷たい無人の更衣室の中、彼女は壁に手をつけて少年に背を向けている。ここでおちんちんを入れてもらい、しっかりと子作りしてもらうためだ。

床がコンクリートでなければ寝そべっていただろう。しかしさすがにここでは背中も痛いからと、勧めに従い後ろから入れてもらうことにしたのだ。

だが見えない背後からの接触は、初めての時より緊張してしまう。

（お兄ちゃんに、お尻、見られてるの分かる。ああ、視線感じちゃうっ）

彼女、芽衣菜のヒップは乳房に見合った充実具合で、くびれラインからの盛り上がりが見えなかった。

いわゆる安産型の臀部である。まろやかな膨らみは、すでに大人顔負けの発達で少年を魅了している。それに水着のカッティングが白い尻肉を恥ずかしいほど溢れさせていた。

だが、そんな脆弱な股布さえもが、彼の手によってスツと横にずらされてしまう。

「ひゃん!! あ、ああ……また、見られて……っ」

しかし義妹妻だつて愛してあげたい。そう思つて、入り口付近を舐めた後で、舌を突き込みネットリと奥まで舐め込んであげる。

「んああつ！ あ、あ、あ！ いや、いやです兄さんっ、口、恥ずかしいっ！」

「恥ずかしくなんかいいよ。芽衣菜のココ、すつごく美味しい。ハチミツみたいで最高っ」
きつとパイズリしながら興奮してたのだろう。細い淫毛の奥は、すでに粘っこい蜜で柔らかに濡らっていた。

ヒダも湿つて舌触り抜群だし、慄きつつも閉じない両足が見ていてとてもいやらしい。そんな彼女に興奮しつつ、ピストンよろしく舌を突き込む少年。するとV字に開いた乙女の股間は、ピクピクと亀裂を震わせ躍った。

「あ、ああ、ああああつ！ だめっですう、も、もっ、芽衣菜、イっちゃいますうっ！」
ベッドに背を乗せ昂る花嫁に、少年はいいよ、イつても、と囁きかける。それを覗き見た彼女は、口に両手を当てて達しそうな乱れ顔を必死に隠そうとしていた。

「ああ、ああつ！ だめっだめですそこっ！ ああいや汚いところっ〜ひいいんっ!!」
「ココ？ このオシッコの孔がいいんだね？」

パツクリと割れたラビアの中。やや上方にある綺麗な小孔を舌先で軽くこすつてみると、
「あひいいいっつ!! あつ！ あつ！ イク、イクっつ！」

薄いブルーの花嫁衣裳がピクピクピクッ！ と狂い躍った。ふくよかなお尻が波打ち揺られて両足もピン！ と伸び上がる。

両手で顔を覆っているが、膣肉もヒクヒク収縮するし奥からドプツと蜜も溢れる。間違
いなくイッていた。

「ふうう。ステキだよ芽衣菜、おま〇こも美味しかったし久しぶりにイケたんだね？ さ、
次は実玖だよ。ちゃんとおま〇こでイカせてあげるからね」

水風船のように揺らぐ爆乳。小刻みに跳ねる豊かなお尻。トロンと緩んだ眼差しも時折
揺すられる大きなお腹も、見て飽きないほどセクシーな孕み妻。

そんな芽衣菜をベッドに残し、今度はミルク滴る実玖を愛そうとする。

ボディラインに手を滑らせると、美巨乳となったミルクバストと孕んだお腹がとてもい
い触り心地。あつ、と身動きする乙女らしさも相変わらぬ悩ましい。

と。フワフワスカートに手を忍ばせてヒップで円を描いていると、目の前のヴェールが
迫ってきて優しくベッドに押し倒された。

「はあ……っ。ね、おにいちゃん、次は……エッチしよ？」

「えっ？ でも、お腹に赤ちゃんがいるし、それはマズいんじゃない？」

最近ご無沙汰だったのもこれが原因だ。これで流産などさせたら一生後悔するだろう。

「大丈夫。激しくしないならいってお医者さんもいってたから。ね？ お・ね・が・い
っ、アニ……ううん、おにいちゃん？」

ピンクの花嫁は赤らみながらもニッコリ微笑み、スカート内で手をゴソゴソする。そし
て、片手でスカートを捲くり上げると、可愛い紐パンがサイドを解かれていて。

「お、おにいちちゃん……み、ミクのおま○こに、おちんちんちようだい？」

もう片方の手が布を押してオムツのように隠している。が、小悪魔花嫁がクスリと笑うと、その手もそつと離されて。

——ヒラヒラッ……ヒクッ、ヒクッ……。

「おお実玖つ。そんなに濡らして……可愛いおま○こもヒクヒクしてるっ」

捲り上げられたスカートの中でパンティが静かに舞い落ちる。するとポツテリと膨らんだお腹の下には、淡い乙女の花園が、しとどに濡れて夫を待ち焦がれていた。

きつと授乳愛撫で絶頂したからだろう。白い内腿にも蜜が伝つて雌の淫欲にまみれていた。

妊婦らしく母乳を垂らし、開いたラビアから一筋の蜜をポタリと落とす。その、淫らで美しい微笑みの花嫁を、これ以上拒むことはできない。否、昂る勃起が拒みたくない。

「分かったよ実玖。さ、隣に寝て？ 激しくはできないけど、お兄ちゃんがいつぱいエツチしてあげる」

美しい花嫁姿をベッドに招いて傷つけないよう横向きに寝かせる。そして寝転がったまま片足を抱え、開いた股間に背後からゆつくりと迫つてあげる。

「あつ？ お、おにいちちゃん、こんな……」

「大丈夫、お腹は傷つけないから。ほら、おちんちん入れちゃうよ？」

一種の側位という形だ。男女共に横向きに寝そべり後背位のように繋がる姿勢で、妊婦

のお腹を圧迫することもない。

それでも気を遣いつつ、ゆっくりと割れ目に押し入ってあげる。L字を描く開脚股間、その淫唇を指で探り、ぬぷぷう……つとカリを埋めていく。

そして、ちゃんと勃起で繋がってあげると、実玖は、はああんっ！ と鳴き声を上げた。「あつあああつ。いつ、いい、よおつ。おにいちゃんの、カチカチっ……アツアツっ……！」
タップリと潤った媚粘膜が、雄の熱さでジットリと温められる。サオの脈動を感じさせられ逞しさを伝えられる。

ソレは先の射精にもめげずに硬く反り返っていて、女陰をみっちり押し広げながら再び自身の形に変える。

そして、受胎子宮を気遣いつつも、優しく中で暴れていくのだ。

——ずちよつずちよつずちよつぬちよつ。

「んあっ?! あっ! あっ! あっいいっ! お、おにいちゃ、おちんち、あつ、感じっ!」
背後からの腰打ちは義妹への愛情に満ちていて、久しく出会えなかつたヒダヒダたちをじっくりとカリで擦り込んでいく。そのたびに、お腹の大きな義妹妻はおとがいを反らして淫らによがってくれるのだ。

「ああ実玖、気持ちいい? 僕はとつても気持ちいいよ」

「はあ、はあ、そ、そんな、恥ずかしいコトっ……バカ……ああああん!」

勃起が優しく深く挿さると、ピンクの花嫁のお尻がわななく、白桃のような谷間の奥、

締めりのよいヴァギナを愛され、なおも義兄の虜とりこにされていく。

だがもちろん、娠悟として久しぶりの膣感触に堪らず悶えていた。

（くうう！ 実玖のヒダヒダ、すぐくピツタリ締め付けてきてどう動いても気持ちよすぎるっ！ もう相性バツグンで最高っ！）

すっかり馴染んだはずの中は今なお狭さを失っておらず、筒状の粘膜器官がネットリと絡んで柔らかく締め上げてくれる。

まるで極上のイソギンチャクだった。細かな粒ヒダで吸い付いては、物凄いヌメリで性神経を麻痺させる。しかも角度を変えて打ち込んでみても、柔軟に形を合わせて敏感なエラを捕えて離さない。

おかげで娠悟のペニスは一突きごとに心地よく高まってしまふ。一度射精してなければもう出ていたかもしれない、溜まっていたのもはつきり自覚させられた。

けれどこのまま果てるのは男としていかなものか。そう思って、背後から妻を振り返らせると思いつきキスをする。

そして腰を止めぬまま、膨らんだお腹をいやらしい手つきで撫でてあげた。
「んむんっ!! ぷはあ、ああっ、だめええ、そこ、赤ちゃんんっ……!!」

「うん、大事な大事な僕と実玖の赤ちゃんだよ。ああっ、どっちも大好きだ、最高に愛してるっ」

彼女は甘い言葉に弱い。それを知る少年は、なおも愛を耳打ちしながらお腹で何度も円

を描く。そこでおへソをツツウ……となざると、狭い膣内がきゅきゅつ！と可愛く抱きついでくる。

さらに耳たぶをカプツと嘯むと、小悪魔花嫁は狂おしいほど身悶えてくれた。

「やあんっ!! つつはあ、はあ、な、ナデナデされてるうう。アタシ、ミクつ、赤ちゃんまで愛されて……か、感じちゃうよおおっ！」

そう。今や実玖は、優しいピストンと愛撫によつて子宮と下腹を同時に愛でられていた。いたわるような手つきで撫でられ突き出たお腹をふるふる揺すり、同時に濡れた子宮唇にカリでねちつこくキスされている。胎内を上下から刺激されては、イタズラな小悪魔も堪らず腰をクネクネ振った。

「はあ、ああつ、ああらめイクっ！ ひ、久しぶりだから、もお、いつちゃううっ？」

誘っておきながら自ら絶頂を語る乙女は、髪を振り乱して淫らにも高まっていく。そんな義妹妻に、少年は愛の言霊ことばまで追い討ちをかける。

「イクそう？ いいよイって？ 可愛いよ実玖。愛してる、愛してる愛してる愛してるっ」

「んやああんっ、いやあいわないれえつつ、いや、いやあ、イクう、イクっ——！」

——ビクッ、ビクビクッ！

小さな桃尻がキュッと締まって一つ大きくわなないてみせる。孕んだお腹も上下に弾んで艶めかしい絶頂を彩った。

「いったんだね？ほんと、可愛いなあ実玖は。エッチな顔もおま〇こもステキっ」

「つっ／＼ば、バカあ……っ。でも、好き……おにいちちゃん大好きっ。ちゅっ」

快樂に泣く義妹妻が顔を傾け唇を吸う。その閉じられた涙目も色つぼく、いった臍肉もヒクヒクうねって気持ちよかった。

そして、いよいよ少年も抽送快樂に身を任せようと思った、その時。

「実玖……っ、実玖ちゃん、羨ましいっ。芽衣菜も、お兄ちゃんに……ちゃんと愛してほしいです……」

青いウエディングドレス姿が胸元も頭に二人に近寄る。まだ入れてもらえてないため、息を整え迫ってきたのだ。

そして達したばかりの恍惚の笑みの双子の姉を覗き込むと、何と姉の乳房に唇を寄せて吸い付いたではないか。

「ひゃああんっ!! な、何すんの芽衣菜? あっやめ——今サレるとっ／＼ああああん!」
途端、ピンクの背中がビクッ、ビクッ! とくねり躍った。背筋と喉を大きく反らし、小振りなヒップもキュキュッ! と締まる。

しかも吸われた乳房はぷるんと揺れて、またも純白を迸らせていた。

「あっあああんっ!! ああらめえ出ちゃううう!! おっばい出ちゃううっ!」

「はあ、実玖ちゃんのお乳、白くて素敵で……ああ美味しいっ、ちゅうっ」

「いんやああああんんっ!!! いやあ吸っちゃいやああんっ!!!」

芽衣菜は瞳を閉じて、実玖のミルクをコクコクと飲んでいく。さらに乳肉も軽く搾って、



まるで搾乳のようだった。

「はああいやあ、ミルクっ、赤ちゃんのぶんなのにいいつ。れも、れもっ、んああいいよ
おおっ!!」

——ぴしゅっ、ぴゅぴゅううっ!

か細い飛沫音と共に、白い乳液がシーツの波に飛び散った。もちろんそれは実玖の母乳
で目の前の芽衣菜の顔にもかかったが、彼女は気にせずウツトリと乳首を吸っていく。

「はあはあ、らめえ、らめらつてばあっ! 感じ、感じすぎちゃううっ!」

「実玖、おっぱい出しながらだとおま○こもすごい締まるよ。動かなくてもシゴかれちゃ
うっ」

一方で娠悟も、彼女の背後で腰を震わせていた。芽衣菜の搾乳が確実に快楽を助長して
いたのだ。

今や膣内はウネウネ蠢き、蜜をサオに塗りたくってくる。とろつとろの膣感が呆れる
ほど気持ちよかった。また抽送を止めてもヒダヒダがザワつき動かなくても快楽が止まら
ない。

(このままじゃ実玖がイカないままイっちゃう!)

そう感じた少年は、自分も搾乳に参加すると一緒になって搾りながら果敢に腰を振りた
てた。

——きゅきゅつもみもみっ。じゅぶじゅぶぐちゅぶばんばんばん!

「いやあああうううっらめえええ!! ああまたイク! おっぱい、おま○こ、らめになるうう!!」

「だめになっていいよ実玖! だめな実玖も好きだ! 好き、大好き、愛してるっ!」

「あああ言っちゃらめええ!! イっちゃうう!!」

横向きのまま、抱きつくように乳房を掴んでぎゅっ、ぎゅっ、と搾り込む。柔らかな手触りと共に温かなミルクが飛び散って艶めかしい。

さらに愛を叫びながら孕み子宮を何度もプッシュ。胎児を気遣って振り幅を狭め子宮唇をとことん小突くと、小柄な花嫁は狂ったように感じまくった。

「らめっ! らめっ! むね、子宮いいっ! イク! イク! おにいちや、またデキちゃうよおお!!」

「ああ僕もイクよっ! 実玖の妊娠おま○こ、もっともっと孕ませちゃうよっ!!」

「あああああああらめええイクううう!! おにいちや、おにいちや——!!」

もはや妊婦であることも忘れ新たな懐妊を求める実玖。自らも腰を前後させて、愛しい雄に子宮唇で熱く触れ合う。

また娠悟も痺れる勃起を加速させて小刻みにカリでキスを続ける。パクパクと喘ぐ入りの感触が途方もなく快感だった。

ミニスカートもすでにベタベタで、丸見えの恥裂は泡まで立ててサオを飲み込む。股間も、乳房も、白っぽい液でドロドロになって淫猥なほどのピンクの花嫁。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方へ入って下さい。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

Valkyrie



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!